

実験展示を評価する

「あるく—身体の記録—」は 実験展示でありえたか

村井 良子

本稿では、実験展示を2つの観点から検証したい。ひとつは、実験展示班が試みた行為について、ねらいが先進的・独創的であったか、展示手法や研究のアプローチやフレームワークの設定が妥当であったか等の観点から検証をしたいと思う。ふたつめは、実験展示の機能やしぐみについて、有効性・妥当性・先進性等の観点から検証を行いたい。

I 試みを検証する

(1) ——テーマ設定の試み

本実験展示では、非文字資料（テーマ）をあえて非文字資料（手段・手法）を用いて表現することにチャレンジしている。その試みは、これまでにないアプローチであり、取り組み自体、先進的かつ独創的であり、まさしく実験的と言えよう。

当初は、食べる、洗う、運ぶ等の日常無意識に行っている行為（身体技法）があがっていたが、最終的には「あるく」という難しいテーマが選定された。前者の日常行為であれば、道具を使うために地域性や文化面が表現しやすいと言える。しかし、「あるく」は道具を使わない日常行為であるため、物証資料が少ない条件下で展示を行わなければならない。こうした条件であることを理解した上で、敢えて展示テーマに設定したことに対しては評価したい。

「あるく」は一般にとって珍しいテーマであったため、興味深く見学する人が多かった。しかし、アンケート結果を見ると、観覧者は実験展示を見て、「あるく」がテーマであることは認識できても、「あるく＝非文字資料」と意識できる人がいなかったことから、展示のねらいのひとつとしてあがっていた

「非文字資料の発見」は達成できていなかったと言えよう。ねらいを達成させたかったのであれば、展示する側の意図をもっと明確に伝える努力が必要だったと言える。

(2) ——画像資料のみでアプローチの試み

通常、「あるく」をテーマにする場合、生物学的・生理学的なアプローチから入ることが多いのではないだろうか。例えば、運動を学習・記憶する小脳の働きや、四つ足から二足歩行への生物学的な進化（道具を使うことによってサルから人類への進化）等をあげることができる。また、本実験展示では、「あるく」姿を規定する文化的・環境的な要因に関する説明（例えば、生活様式、服装、道具、生業等に関する歴史的・地域的な解説や物証資料の展示）を施すことが多いと思われる。しかし、本実験展示では、こうしたアプローチを極力しないようしている。

こうしたアプローチ・資料構成のため、本実験展示は、研究成果として「非文字資料の画像や映像からひも解いたかつての歩くかたち」を示すにとどまっている。

また、研究プロセス（研究者の思考の回路）を観覧者に共有してもらいたいというアプローチが実験展示班にはあったが、実際には研究資料を展示するだけで、研究の途中で生まれた疑問を示していなかったために、残念ながらこのねらいは達成できていなかったと言えよう。

こうした結果から、画像資料のみだけでは、ねらいの達成は難しかったと言えるのではないか。本実験展示のアプローチ、研究対象の領域や資料構成の選定は、果して妥当であったのかは疑問が残る。今

後、研究領域を広げる等して、ねらいが達成できるよう、実験展示をさらに高める努力をしていただきたいと思います。

(3) ——仮説を展示するという試み

本実験展示は、「かつての歩き方が身体に記憶されている」という仮説を展示しているものだ。しかし残念ながら、そのことは観覧者に伝わっていなかったとアンケート結果から言える。特に若い世代の中には、仮説ではなく実証されたことと誤解をしてしまう人もいた。これは、一般的にミュージアムや大学の展示は実証された研究成果や結果の公開の場という認識があることに起因しているとも言えるが、展示する側としては、誤解が生まれないよう十分に配慮すべきだったと言える。

今回、情報の送り手として、仮説であることを明確に伝える義務を怠ったことは問題ではなかろうか。仮説を展示したことを入口に明示すべきであったと思う(図1)。併せて、一緒に考えるための実験場であることも入口で伝え、参加を促すことも必要であったと思う。

(4) ——展示開発プロセスの試み

近年、展示を企画・制作する場合、観覧者のター



図1 義務として、入口に展示のねらいや位置づけを明示

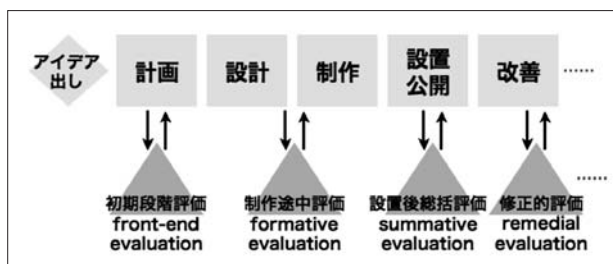


図2 展示開発プロセスにおけるエヴァリエーション

ゲットを設定し、そのターゲットに対して有効な方法を検討・決定するために、かつ無駄な展示物を作らないために、エヴァリエーション (evaluation: 展示評価・検証、PDCA マネジメントサイクルの check にあたるプロセス、図2) を導入するケースが増えてきている。

今回の実験展示も、様々な試みを行うことを予定していたため、ターゲットである学生・教員・市民・研究者を対象に、2006年度からエヴァリエーションの実施が計画されていたが、実現には至らなかった。本実験展示をつくる過程も研究対象としていたため、必要不可欠のプロセスだったと言えるので、設置前にできなかったことは大変残念と言えよう。

しかし、設置後(2007年11月の会期中)行ったエヴァリエーションを経て一部改善(図3)をし、2008年2月のシンポジウムをむかえているので、修

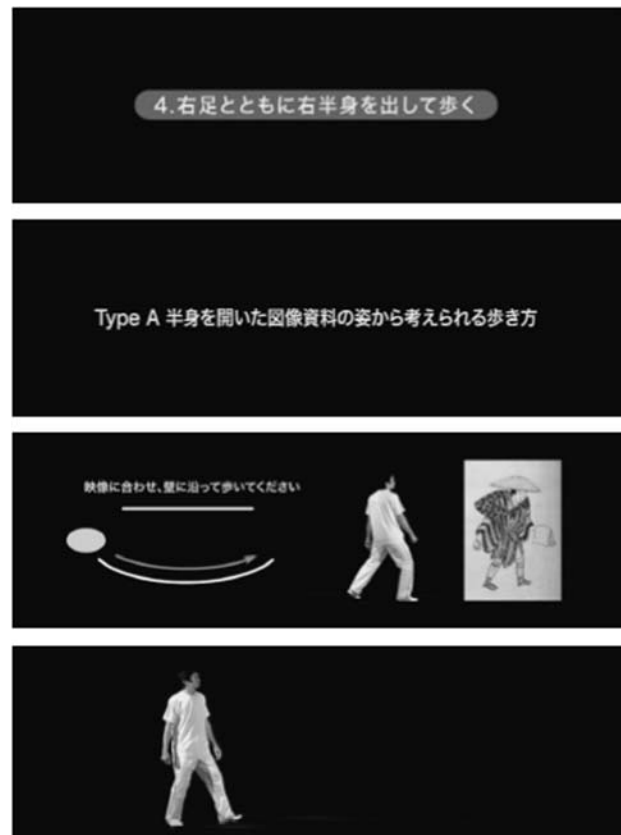


図3 改善例

図像から想定した歩き方の提示。しかし、体験者は実際過去にこうした歩き方をしていたと誤解する場合も見られたため、あえて図像の通り、体験してもらっていることを映像内のテロップに明示し、インストラクターも説明を加えるように改善した。

正的評価は実施したと言える。また、11月の公開を制作途中と位置づければ、制作途中評価を実施したとも言える。

確かに理想的なプロセスは踏めなかったが、有効な展示をつくるためにエヴァリエーションのプロセスを組み込んだ姿勢や方向性は評価できる。

今回の展示は研究者だけで構築されたものため、ねらいやメッセージが観覧者に伝えきれていないことも多々見受けられた。この点を改善するためにも、本実験展示を完成形のための一プロセスと捉え、バージョンアップしていくことを検討していただきたい。

(5) —— 研究成果発信装置としての試み

展示という手法は、多くの人に研究成果を直接発信する装置として有効であったと言えよう。これは、アンケートやグループインタビュー等からわかるように、老若男女が本実験展示に興味を持ったことがわかる。特に身体技法を伝える場合、研究論文を文字で伝えるよりも、体験型展示は有効な手法と言える。

また、展示はつくる過程でも公開中でも、観覧者とのコミュニケーションによって新たな研究の視点を獲得できる手法でありえるとも言える。展示は、共有の場をつくりやすいメディアであることから、研究のための実験場として機能できる可能性が高い。その機能を生かすためには、展示室でのディスカッションや展示改善ワークショップ等を実施すべきだったと言えよう。

II 展示を検証する

(1) —— 展示意図は伝わったか

観覧者への調査（質問紙によるアンケート、グループインタビュー、行動観察）によって、下記のようなことがわかった。

まず、第一段階のねらい「観覧者の歩くという行為に対する興味を喚起する」は達成できたと言えよう。第二段階のねらい「歴史軸で、歩くことを意識

化する」も、観覧者のおおよそ半数の人が達成できたと推定できる。第三段階のねらいである「誰もが非文字資料（身体技法）を内に持っていることを発見」に関しては、調査結果からだけ見ると、観覧者をこのレベルにまで導けていないことがわかる。

観覧者の中には、もの足りなさや中途半端な印象を持ったり、展示内容に疑問を持ったり、展示内容よりも高次の情報を求める傾向の人も見られた。自分なりに、歩き方を規定する文化的な要因等を考える人もいた。こうした観覧者の消化不良の思いは、展示の現場で研究者や実験展示班とのディスカッションによってすくい上げ、展示改善や研究へとフィードバックしていくことが望ましいと言えよう。

今回伝えたいメッセージを、青木氏の記録から、改めて確認してみよう。

「私たちの「歩く」という行為が近代化等の影響から変化しながらも、世代を超えて私たちの身体に伝えられてきた可能性があることを示す。」

「現代の私の歩く姿が、世界的に見て普遍的なものではないこと、時間軸のなかで様々な状況で変化して現代的な歩き方になってきたこと。変化しながらも、かつての歩き方が身体に「記憶」されている。」（下線は筆者）

上記のメッセージを伝えたいのであれば、地域差や、変化の要因となった様々な分野の事物も研究対象にし、展示すべきであったと思うが、本展示は図像資料にこだわりすぎて、「歩く」形が展示の中心になってしまっている。

このことから、達成したい目標、およびそれを伝えるための展示構成や資料の選定が妥当であったかを検討し直す必要があると思われる。今後継続するのであれば、この大前提に戻って、検討していただきたい。

(2) —— 展示手法は妥当だったか

見るだけでなく、体験できる場をつくったことによって、観覧者の身体感覚に直接訴えかけることができた。「身体技法」を伝える手法として、有効な手段の選定であったと言えよう。また、体験型展示は、歩きやすい、無理がある、あり得ない等を実感

でき判断できるため、仮説検証のための展示手法としても有効であったと思う。

体験展示「あるく回廊」にインストラクターを配置させることによって、身体技法の「伝承」の場として成立していたのではないと思う。また、インストラクターが体験者ひとりひとりの年齢や状況等に応じて対応できるので、観覧者の身体を自覚させるきっかけを作り出しやすい環境にもなり得ていた



図4 図5 伝承者であり、コミュニケーターでもあるインストラクター



図6 図7 「はきかえて歩いてみよう」の体験コーナー

と思う。(図4、5)

「あるく回廊」の他に、「はきかえて歩いてみよう」の体験コーナーも、「歩く」姿が形作られていく要因等を自身で考える場として有効に機能していた。一本歯の下駄をはいてみて、はじめてすり足やかつての歩き方が理解できたと言う感想もアンケートに見られた。(図6、7)

その他、展示手法に関して、いくつか問題点が見られたが、これらはすぐに改善ができることなので、本文での説明は省く。図8～11参照。

(3) ——インタラクティブでありえたか

展示は、もともと双方向からの働きがあって成立するコミュニケーション・メディアである(図12)。



図8 「あるくに触る」コーナーの展示は、展示台が低いために大人では触りづらい。

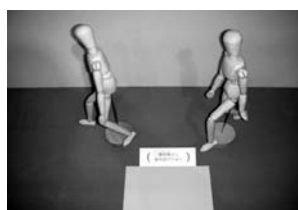


図9 展示台が低いため、モデルの歩く姿を横から観察できない。



図10 中腰になって、真横からモデルを見た場合。



図11 展示造作デザインの問題点
白い布で覆って見てもらいたいものを絞り込む手法を採用。そのため、影や死角ができて、見づらいという感想も多かった。

つまり極端な言い方をすれば、一方的に情報を発信するメディアは、展示とは言えないということである。こうした認識のもとに、展示を開発することが重要と筆者は考えている。

情報の送り手側に伝えたいメッセージがあり、それを伝えるため展示はつくられる。より効果的にメッセージが伝わる展示手法を決定するために試作品等をつくり、エヴァリエーションを行い、バージョンアップをしていく。また展示からの働きかけによって生まれる利用者のリアクションは様々で、情報の送り手側（展示開発者）が想定していた通りにはなかなかいかないものである。このブレを少なくするためにも、エヴァリエーションは重要な役割を担っている。

本実験展示は、「あるく」体験とインストラクターの働きかけによって、インタラクティブ（双方向）な展示環境を作り出すことに成功していると思う。

また、研究や展示開発へのフィードバック情報を得るために、会期中に、質問紙によるアンケート（回収数60件、図13）、グループインタビュー（観覧した学生を対象に1回、図14）を実施し、インストラクターノート（利用者の代弁者として記録）からの情報も加えて、利用者の反応を分析し、専門家

によるレビューも行い、研究や展示改善に生かす努力を怠らなかった。そのため、本実験展示の会期中は、図15のようなインタラクティブ（双方向）な関係性が成立していたと言えよう。

Ⅲ 今後に向けて（提言）

(1) ——非文字資料による実験展示の意義

身体技法を伝える手段・資料として、非文字資料にこだわり、文字を使わないという当初の計画の実験性に強く引かれ、本研究に協力するようになったことを思い出す（その後、残念ながら文字は使うことに計画変更）。

また、人体モデルによる展示は、もともと視覚障害者も体験できるようにとの配慮から検討されてきたものだった。

非文字資料の展示は、本来はバリアフリー、ユニバーサルデザインへの挑戦であり、展示の大きな目標は、共生の世界の実現を達成させることだと個人的には思っている。ぜひ、そうした観点で、再度、実験展示に取り組んでいただきたい。そこで、筆者

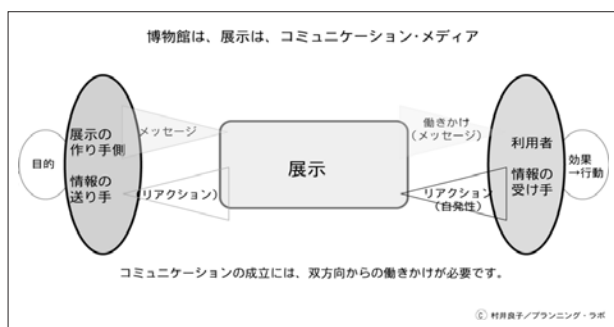


図12 展示のしくみ



図14 学生対象に実施したグループインタビュー



図13 廊下に置かれたアンケート用紙

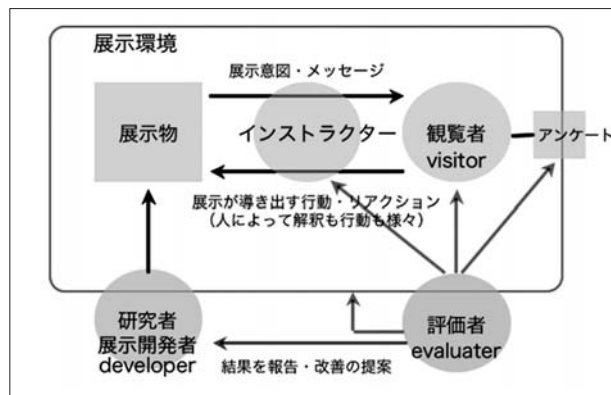


図15 本実験展示における関係性



図16 図17 パリ下水道博物館 映像展示

が「非文字資料による実験展示」と考えている例を2つ紹介して終わりたい。

ひとつは、パリの下水道博物館（Musée des Egouts de Paris）にある映像展示（図16、図17）。この映像は、言葉（文字・声）による説明はまったくなく、動画と静止画、音楽、下水道の音等で作られている。パリは世界中から観光客が集まる都市で

ある。そのため、言語によるバリアを取り払った展示が必要な環境とも言えるが、言葉なしでも十分に理解できる質の高い展示だったと思う（1995年見学時）。

もうひとつの「非文字資料による実験展示」例は、Dialogue in the Dark。このプログラムは、7名1グループにアテンドがひとりついて、暗闇の展示環境を探索するというもの。アテンドは全盲の方。この体験を通して、様々な感覚が覚醒し、外界の刺激を敏感に感じ取ることができる。視覚障害者の立場の理解にも役立つプログラムである。日本でも開催されているが、ドイツ等世界中の様々な都市でも開催されている。

(2) ——結びにかえて

COEプログラムは今年度で終了するが、この実験展示を成長発展させるために、ぜひ今後も継続して研究を続けていただきたい。

神奈川大学の研究という行為のDNAの中に、展示という研究の実験場を「場の記憶」として、そして開発するプロセスを「からだの記憶」としてとどめていただきたい。

（むらい・よしこ）

写真提供：図1, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 11, 13, 14は実験展示班より提供／図9, 10, 16, 17は筆者／作図：図2, 12, 15は筆者
 ※本文は2008年2月24日に開催された第3回神奈川大学COE国際シンポジウム「非文字資料研究の新地平」セッションV「身体技法を展示する」におけるコメントを原稿化していただいたものである。